スウェーデン人の休暇と所得保障

藤　田　雅　子

Swedish Holidays and Paid Leaves

Masako Fujita

The Swedish tradition has clearly distinguished between work and free time. Work is a very important part of Swedish life and culture. And they enjoy holidays so much.

In Sweden, women make up half of the Swedish workforce. The Swedish can take their statutory 5 weeks of annual vacation and enjoy 15 months of maternity leave, including the father. The Swedish take the whole summer off work.

The school year is divided into 2 terms (40 weeks) with 12 weeks holiday. The first term begins in the second or third week of August and continues until the third week of December. Christmas holidays begin in the third week of December and last until about the 10th of January. The second term is usually from the second week of January until the first or second week of June.

Summer holidays are from about the 10th of June until the middle of August. Midsummer is celebrated during the weekend around the longest day of the year. In summer, men and women of all ages enjoy a long vacation with the shining sun. In February or March each commune takes a week holiday for the school called SPORTLOV(sports holiday). During this week most parents take the children skiing.

The Swedish have an almost sacred relationship to nature. They

have the right called ALLEMANSRÄTTEN. It means the legal right of access to private land. This is an old unwritten law unique to Sweden which encourages everyone to enjoy the outdoors freedom. The Swedish have the liberty of hiking throughout forests and fields, going swimming, sailing, camping, picking berries and mushrooms anywhere while certain restrictions apply. Allemansrätten also enumerates responsibilities, for example to not litter or destroy.

The most popular sports in Sweden are predominantly winter sports such as skiing and icehockey. Summer sports such as tennis, football and golf are enjoyed.

はじめに：休暇を楽しむ

『余暇を楽しむゆとりなし』という見出しで、夏休みを前に世論調査の結果が紙上に掲載された（「読売新聞」2000年7月15日）。日本国民の６割が自分の余暇の過ごし方に満足しながらも、半数は余暇を「休養やくつろぎのための時間」にしたいと考え、夏休みの希望は「１週間未満」の人が４割弱であるという。休暇を積極的に楽しむ余裕のない、日本の余暇事情が浮き彫りにされたとコメントされていた。

休暇を楽しめない典型的なタイプはワーカホリックや仕事中毒になるが、読売新聞の記事を裏打ちするかのように、スウェーデンの代表的な日刊紙「ダーゲンス・ニィヘッテル」（通称ＤＮ2000年7月31日）が『日本人に休暇（バカンス）はない』という特派員報告を掲載している。概略を紹介しよう。

「終戦後日本人は、ずっと忙しくしてきた。この恐ろしいほどの勤勉さが、数十年間に日本を世界第２位の経済大国に押し上げた。異常ともいえる労働志向に対して近年批判が高まり、若い世代の多くが、コマネズミのように働くことを拒絶している。彼らは人生のすべてを会社に捧

げる父親たちの姿に恐怖感を抱いているからだ。90年代に入り、働き過ぎで死亡する人（大半が男性）が増加し、職場で倒れたり、心労に耐えかねて自ら命を絶っている。過労死に当たる。遺族たちは過労自殺を労働災害として認めるように訴え、今年の春、最高裁判所が、週80時間の労働を強いられたあげく1991年に自殺した24才の青年の遺族に対して、補償金の支払いを広告会社、電通に言い渡した。このように遺族の要求が通るようになり、他のケースも現在係争中である。数十年に渡る働きすぎが多くの日本人に染みついてしまい、最近では早く帰宅するように、あるいは休暇をとるように勧めているにもかかわらず、多くの人が勤務時間後も事務所に居残っている。」

ところで日本では、働きづくめに働くとか、寝食忘れて働く人がまじめで、仕事を忘れて遊びに夢中になるのは怠け者のように評価されやすい。適度に働きそして休むことが当然のスウェーデン人から見れば、バカンスのない日本人は特異であると言われても仕方がないだろう。

労働から離れて休暇を取るにも２通りある。ひとつは労働以外の時間を自由に使う休暇で、もうひとつは出産や子育て、傷病にともなう休業で人生にとって不可欠な休暇である。この小論では、日本人にはバカンスはないと断定するスウェーデン人が、いかにこの２つの休暇を活用しているかを見て、休暇の意義を改めて押さえることを目的とする。

1.　労働と休暇の権利

1　仕事と休暇のバランス

スウェーデンは福祉国家で、国民はなかなかの遊び上手である。遊んでいて社会福祉が面倒をみてくれるとなれば、怠け者になるという誤解を与えるかもしれないが、よく働き、休暇も取ると表現するほうが適切である。福祉サービスは住民が納める税金の再配分であるから、男女共

に収入の３分の１をコミューン（県と市町村）に所得税として納める。ちなみに専業主婦は移民など一部で、稼働年齢の女性の２～３％のみである。企業は懸命に儲け、賃金を払い、育児休業や老齢年金など社会保障費の財源を国に納める。国民は福祉と経済の両面からガードされるので、安心して労働し、子育てをし、老いを迎える。

働く時は働き、充電する時は休む。週休２日、有給休暇（semester）は年間５週間あり、セメスターには給料の12％が上乗せされるが、原則的にスウェーデンには現金支給のボーナスはなく、時間によるボーナスである。第１表は業種別に見た超過勤務の状況である。余計に働いた時間は代休として返却してもらう。ところでスウェーデンの子どもは、勉強、宿題、進学が気になる日本の子どもとは違い、学校の休みは自由に時間を使い、親も子どもに合わせて休暇を楽しむ。

第１表　超過勤務の状況

職種	総従業員 人数（千人）	調査週間に超過勤務をした従業員 人数（千人）	超過勤務者の超過勤務時間（週当たり） 時間	通常勤務時間に対する超過勤務率 全従業員中の％
農業・林業・漁業	３５	３	９．３	２．２
製造・電気・水	７６２	９５	１２．５	３．０
（うち技術産業）（	３６４	５２	１４．２	３．３ ）
建設業	１７３	１９	１０．８	２．８
交通・通信・流通	６５７	７８	１１．９	３．３
金融	３９２	５４	１３．９	３．４
教育・研究	３１８	１９	５．９	１．５
保健・社会福祉	７５７	４０	５．３	１．６
対人サービス業	２５０	２０	８．２	２．８
行政	２０８	１７	８．３	２．２
その他	４	０	９．５	２．４
合計	３５５８千人	３４７千人	９．８時間	２．６％

資料：STATISTISK ÅRBOK för Sverige 2000

2　労働時間の短縮と有給休暇の増加

休暇は労働以外の余った暇「余暇」ではない。意図的に労働から解放される時間をつくり出さなくては、休暇はできない。スウェーデンで週当たりの労働時間を48時間にしたのは1919年で、第１次世界大戦直後に溯る。第２次世界大戦終了直前の1944年に与党の社会民主党は「完全雇用」を計画した。1960年に労働時間は週当たり45時間、1969年に42.5時間になり、40時間になったのは1971年で30年前である。ちなみにスウェーデンは２回の世界大戦に巻き込まれず、人的にも物的にも損失を被らなかった。

労働時間を短縮すれば休暇は増加する。すでに1938年に２週間の有給休暇が規定されたが、第２次世界大戦前である。1953年に３週間になり、1963年に４週間、そして1978年に５週間になり、現在に至っている。政府与党の社会民主党は、2002年より毎年１日ずつ５年かけて１週間（５日と週末）増やし、有給休暇を６週間にする決定をしたという（2000年９月）。現在、大人は年間５週間プラス週末２日、子どもは年間３カ月プラス週末２日を休んでも、産業界は世界を相手にびくともしないし、18歳までに労働者かつ納税者に仕立てる教育もできる。

写真１　労働と休暇は国民の権利

2. 傷病や子育ての休業は社会保障が所得保障

バカンスとは別に、人生に必要な「休暇」もある。病気や怪我などによって労働から離れる「傷病休業」に対して雇用主は賃金を払わないため賃金カットになるが、社会保障の対象となり所得は保障される。企業などに依存する日本とは、社会の仕組みが違う。

日本の働く女性は産休は当然でも育児休業が取れない場合もあり、ましてや男性となればさらにむずかしい。育児休業制度があっても雇用保険に加入していなければ休業中の所得保障はない。子どもは将来の労働者で納税者であるから、社会が親の子育てを実際面でも経済面でも支援すべきである。少子化は工業先進国にとって深刻な問題である。

スウェーデンでは1人の子どもの誕生によって、母親と父親は合わせて450日の育児休業がとれる。第2表に示すように、育児休業の延べ日数から見ると、女性が88%、男性が12%で（1999年）、母親が主に育児休業を取るのが現実である。しかし育児休業のうち30日は父親も育児のために休まなくてはならないし、逆に母親が働き続けるために父親が主に育児休業をとっても、母親は必ず30日は休んで育児をしなければならない。360日は収入が保障され、残りの90日は1日に60krの手当金だけだが労働を離れることはできる。育児休業中は雇用主ではなく、社会保障が収入を保障する。

写真2　人生に不可欠な育児休業、父も権利と義務と

男性ももっと育児休業を取るべきで、現状は男女平等ではないという批判がある。一方、女性は育児休業中は職場からはなれ育児を楽しんでいるし、女性自身が赤ちゃんの世話には適していると考える傾向もあるという。ところでこの育児休業は子どもが生まれてから連続して使わなければならないということはなく、８歳まで延長できる便利な制度である。また母親が出産するときに父親は10日間の「産休」を取ることが義務づけられている。与党内では現在、育児休業450日すべてを所得保障の対象とする方向で検討が進んでいるという。

子どもが病気のときに親は「看護休業」として、子ども１人につき年間120日を限度に所得が保障される。第２表に示すように看護休業の延べ日数から見ると、母親が66%、父親が34%という割合になり、男性も子育てに頑張っている様子がうかがえる。他にコンタクト・デイ(kontakt dag) という休暇があり、12歳以下の子どもをもつ親が、子どもの学校に出向いて教師と相談するために、年間２日間を１人の子どもに使える。保護者会は夕方７時頃から開かれ、親は仕事を休まなくてもいい。保育園は就学前学校に移行し教育機関になっている。

社会人が取る「教育休暇」には所得は保障されないが、１年を限度にキャリアアップのために使える。他方、企業がスタッフを大学などに出して再教育してもらう場合は、労働時間として計算するので、賃金は雇用主が支払う。近親者の終末看護のために、１人につき60日まで休業手当金が支給される。社会福祉や医療が整っていて、家族の介護負担はないし、高齢者も自立しているので、看護休業を使う人は限られ、死に逝く人間の最期の望みを叶える休業で、労働者の権利とはいえない。

第２表　育児休業と看護休業の男女別推移（1974～1999年）

	育児休業延べ日数			看護休業延べ日数		
		年間の男女比（%）			年間の男女比（%）	
年	（数字×1000日）	女性	男性	（数字×1000日）	女性	男性
１９７４	１９，０１７	１００	０	６８９	６０	４０
１９８０	２７，０２０	９５	５	３，０４２	６３	３７
１９８５	３３，１９３	９４	６	４，１５６	６７	３３
１９９０	４８，２９２	９３	７	５，７３１	６５	３５
１９９５	５０，３９３	９１	９	４，９１１	６８	３２
１９９６	４２，１７７	８９	１１	４，５１６	６９	３１
１９９７	３７，９０５	９０	１０	４，４８９	６９	３１
１９９８	３６，３２７	９０	１０	４，４６８	６８	３２
１９９９	３６，０３６	８８	１２	４，４６１	６６	３４

資料：På tal om Kvinnor och Män 2000

3.　季節と休暇

１　イーダの夏の唄

北に位置するので（北緯55°20′～69°4′）、夏と冬の季節がはっきりしている。子どもは２月中旬から３月上旬にかけて１週間のスポーツウィーク（sportlov）があり、前後の週末を入れて９日間の休みである。この期間に大人も残業など時間の貯蓄を引き出して、スキーなどウィンタースポーツを楽しむ。そして復活祭（Påsk）は春待つ心を掻き立て、短いが貴重な休みになる（写真３）。

「イーダの夏の唄」（Idas sommar visa　ゲオルグ・リーデル作曲）は、世界の子どもに親しまれる「長くつ下のピッピ」の作者アストリード・リンドグレン（Astrid Lindgren）が作詞した。少女イーダが雪が降る季節に夏を夢見る歌で、スウェーデン人の心を代弁している。

夏が来れば、夏らしい夏になると思わないで
夏に、私が花が開くようにして
牧場をみんな緑にしてあげるわ

でも、私は雪かきをしたばかりよ
つばめを用意するわ、えさになる蚊もね
木に新しい花をつけて、小鳥の巣をつくって
夕方には空をピンクに染めるの
子どもにスムルトロン（実）をつんで、みんなで食べるの
幼い子にはちっちゃな楽しみを
子どもたちが飛び回る楽しい場所をつくってあげるの
夏いっぱい、一生懸命に走り回るの

6月中旬に学校は学年末を迎え、夏休みになる。夏のバカンスのスタートである夏至祭（Midsommardagen）では、生花の花冠（リース）を戴き（写真4）、民俗衣装に身を包み、歌い、踊り、アクアヴィット（Aquavit）に酔い、酢漬けの鰊（にしん）と新ジャガに舌鼓を打つ。新学期の始まる8月中旬まで、大人も大型バカンスを楽しむ。

学校は、クリスマス（Juldagen 12月25日）を迎える前の12月第3週頃から休みに入り、新年の1月6日（クリスマスから数えて13日目の休日 Trettondedag Jul）まで、週末が入ると10日くらいまで休む。宗教離れが進んでもクリスマスはやはり大きな行事で、多くの大人も休みである。

写真3　復活祭は春を呼ぶ

写真4　夏至祭は
大型バカンスの開始

写真５　クリスマスは夏に次いで長い休暇

２　自由な時間

７月から８月上旬はスーパーやデパートは開店しているが、個人営業の店は「バカンスのため８月某日まで休業」という張り紙が軒並み貼られ、図書館が時間を短縮するほど、町の人口は激減し閑散とする。とくに７月は全国を４分割し、製造業従事者が順次休暇を取る産業セメスター（industri semester）で、生産部門を一時的に閉鎖する。王様も大臣もバカンスをとり、マコミをにぎわす面々もこの時期には登場しない。テレビのニュースキャスターも日焼けのために歯ばかりが白い。夏は自然が人間に息吹きを与える。

夏が過ぎるとクリスマスまでの４カ月は、仕事や学業に専念する。

イブからクリスマス当日は家族と共に過ごすが、冬の休暇中はウィンタースポーツを楽しんだり、避寒のために太陽を求め南国に滞在したりする。

4.　森と水と太陽と

1　自然へのアクセス権

古い、自由、山、北国、静か、喜び、太陽、空、緑あふれる野原‥‥スウェーデン国歌に歌われる印象的な言葉を抽出してみたが、このとおり自然とのふれあいがゆたかである。地理的には国土は森林54%、丘陵16%は、湿地11%、湖と川９%と自然が占める面積が広く（2000年)、南北に長く、東側は海岸線が続く。老若男女たいていの人が好むのは、日光浴と森林浴そして水浴である。太陽と緑と水と戯れて時間を過ごすから、雨の多い夏は期待を裏切られ国全体を絶望に陥れる。

ここでこの国に独特の「自然へのアクセス権（Allemansrätten)」についてふれておこう。これは人間が自然と接触する機会を守る原則で、土地の所有権以前からの社会的合意で、書かれた法律ではなく不文律の原則に基づいている（Allemansrätten töjs för långt, ＤＮ2000年8月15日)。法治主義社会である今日では、国体法規定である成文法の形式のもと国家基本法（憲法）によって、だれでも森や湖など自然へのアクセス権が保障されている（写真６～９）。

自然を残すための維持と管理はコミューンの仕事で、自然を商売の餌食にはしない。自然を大切にする姿勢は保育園（1998年より就学前学校）や基礎学校で教育され、親からも学ぶので、自然へのアクセスの仕方と自然保護は、教養として国民の身についている。森、湖、海でゴミを散らかしたり、自然を破壊する行為が許されないのは当然で、他にも、許可を得ない動物の捕獲や狩猟を禁止、川や湖での釣りにはライセンスが必要、特定の植物や鳥の卵の採取を禁止、畑の通り抜けを禁止、住居の周辺への侵入禁止、私有地で泳いだり何かを建てることの禁止など、国民の義務は社会のコンセンサスを得ている。

写真６　不文律の原則「自然へのアクセス権」が定着

写真７　子どもは生活の中で自然との共存を体験する

首都スットクホルムですら、市民１人が80㎡もの緑地を確保している計算になり、中世の館をティハウスとして配置するにしても、自然との調和を考慮している。自然へのアクセス権ゆえに森林や水辺で、老夫婦も赤ちゃん連れもくつろげる。三世代の同居はなくなったが、自然の散策では高齢者を交えた家族連れをよく見かける。ピックニックをしても、

きちんと後始末をする。

写真８　幼い頃からボート遊び、救命具を身に付けて

写真９　ボート、日光浴、ジョギング、夏を満喫

２　湖と海

スウェーデン人が親しむ、エベルト・タウベ（Evert Taube）による「帆掛け船が走る限り」（Så länge skutan kan gå）という歌の一節を引用し

てみよう。

風の吹くまま、気のおもむくまま
お金がなければ舟に乗って
青い凪の太陽が照る限り
心臓の鼓動が打つ限り

夏は天気がよければ、湖や海にはヨットや小舟が浮かぶ。水辺のセカンドハウスにはボートがつながれ、ヨットハーバーにはマストが林立する。レンタルもあり、ヨットは3,500～5,000kr、モーターボートは7,000～9,500krである（１週間、４人乗り。ＤＮ調査2000年7月31日）。４万円から10万円で家族４人が１週間楽しめる。

2000年は７月末の４日間、世界の大型帆船がストックホルムに集結し、ようやく日が暮れた午後11時から打ち上げ花火がバルト海を彩った。いっせいに出港する最終日は、帆船を見送るために、湾を見下ろす高台は人びとがひしめいていた。

海や湖で水浴できる季節は太陽が照る盛夏に限られ、水辺は甲ら干しをする色とりどりの水着でにぎわう。冬には湖は凍り、人が湖上を歩くことも、海水まで凍って砕氷船が活躍する年もある。バルト海が氷結してもバイキングラインやシリアラインといった船会社の数万ｔクラスの大型フェリーは夏同様に隣国とを結ぶ。

写真１０　夏と太陽の季節は戸外のティ、ビール、食事

写真１１　夏真っ盛りにガーデニングは最適

３　太陽

スウェーデン人が切に望むのは太陽である。日本人なら日陰や木陰を求めるのとは逆に、スウェーデン人は日向をさがす。夏はレストランやコーヒーショップ、ビヤホールは建物の外側にテーブルと椅子をしつら

える。天気のよい日は店の中は空っぽでも、外の席は満席である。太陽の力が弱まると、これらのテーブルと椅子は徐々に消えて、秋になる。

11月上～中旬の「全聖人の日」(Alla Helgons dag) あたりから日照時間は極端に短くなり、温度は下がり、天候がすぐれず、太陽の顔をなかなか拝めない。晴れても暖かさを感じない太陽ではあるが、照れば青空と明るさがうれしい。

北国の夏は遅いが、６月にはベランダや庭にテーブルと椅子を出し、降り注ぐ太陽の光の中で、コーヒーをすすり、ゆっくりと新聞に目を通す。これは至福の時である。草花を育て、外の空気と太陽を120％楽しむ。だれもが短い夏の太陽をむさぼっている。

コロニー (koloni) と呼ばれ、園芸道具が置けて、お茶を飲むだけの可愛い小屋 (10㎡以下) と庭が集合した地域がある (写真11) 。コミューンが市民に貸す花園用の土地である。春先から草花の手入れをし、６～７月には、百花撩乱の夏本番となり、コロニーは地上の大きな花束のようである。庭をもたないアパートの住人は、週末と夏のバカンスをこうしたガーデニングで過ごすのは喜びである。

４　森

町を抜けるとすぐに森や林になる。夏は木漏れ日のなか夫婦や恋人同士が語らいながら散歩する。森は苔モモ(リンゴーン)、ラズベリー、ブルーベリーを人間にプレゼントしてくれる。ヒースが地面をピンクに染める晩夏から初秋は、キノコ刈りの人びとがバケツやバスケットを手にし、長靴スタイルで森に入る。新聞は毒キノコの見分け方を特集し、注意を促す。今年 (2000年) の夏は前半が雨模様だったので、キノコの育ちはよかったという。値段は高いが美味しいカンタレル (kantarell) がマーケットにもお目見えすれば、季節はもう秋である。

冬はスキーやスケート、アイスホッケーのシーズンで、全国を４分割して、順次スポーツウィークを実施する。ロッジも適正な価格で、冬の自然を満喫できる。極寒の季節でも、防寒服に身を包み森を歩く人もいる。ノルデックスキーは北欧が発祥地で、冬に野山を楽しむスポーツである。春夏秋冬、森は人間に恵みを与えてくれるが、頑固なまでに、自然へのアクセス権と同時に環境保護を維持してきた結果である。

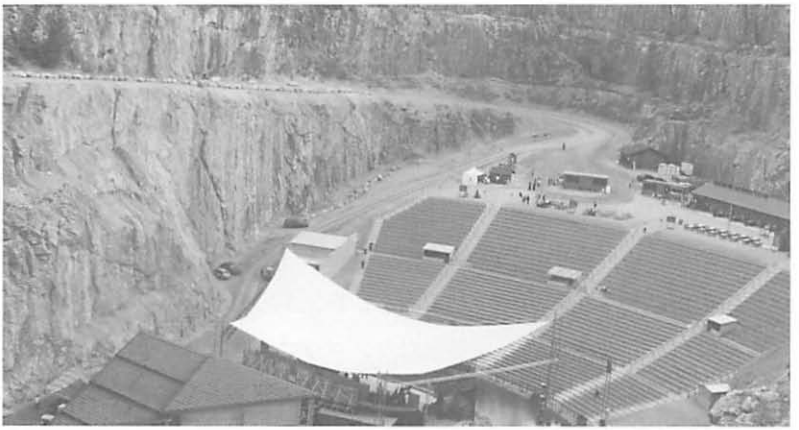

写真１２　元採石場は、今は巨大な野外劇場。オペラなど夏の催しに

写真１３　公園劇場は無料で、芸術を鑑賞

写真１４　１７世紀の家の庭で小さなコンサート

5.　文化的な休息

1　音楽文化

夏は野外でのコンサート、舞踊、オペラなどの催しが多彩である。パルクテアテル（parkteatern「公園劇場」）は、大きな公園を使って夏の日の夕方から芝居やダンスなどを行い、入場料は無料である。娯楽を求めた大衆運動の名残りである。ロイヤルオペラや本場スペインのフラメンコダンスは数千人の聴衆を集める（写真13）。

晩夏恒例のロイヤル交響楽団（Kungliga Filharmonikerna）の野外コンサートは、新聞社ＤＮ主催で、今年25周年を迎えた。ストックホルム県と傷害保険会社が後援し、入場料は無料である。海洋博物館前の広大な芝生は１万人を越える聴衆で埋まり、敷物をもち、ピックニックをしながら開演を待つ。今年は第３表に紹介する曲目が奏でられた。

一方屋内であるが、ロイヤルオペラハウスやコンサートホールは、秋口から冬、春に客を集め、外国の著名な演奏家やキャストも登場する。

１年間のスケジュールが冊子になり、指定席は町のチケット屋で入手できる。文化活動に国の補助があり、税率が６％（一般消費税は25％）に抑えられているため、手頃な値段で高い芸術に接近できる。

教会のコンサートも年間を通して楽しめる。パイプオルガンだけではなく、クラシックを中心に工夫が凝らされている。聴衆はクリスチャンというわけではなく、中高年を中心に音楽愛好者が多く、入場無料になっていれば心付けを寄進すればいい。今夏は、若手ロシア人兄妹によるチェロとピアノのサロンコンサート（SOFIA 教会）や、パリの定評ある若手オーケストラ（Orchestres de Jeunes Alfred Laewenguth）とストックホルム音楽高等学校のジョイントコンサート（KUNGSHOLM 教会）が心に残る。

第３表　　ＤＮコンサートのプログラム

司会はクリスチャン・ルーク
指揮はロイヤル交響楽団常任指揮者のアラン・ギルバート

1	ヒューゴ・アルフェーン	「祭典序曲」（スウェーデン）
2	ステーン・フリスベリー	「連隊歌」（スウェーデン）
○	みんなで歌おう	
	エベルト・タウベ	「帆掛け船が走る限り（流浪の唄）」（スウェーデン）
3	ヨハネス・ブラームス	「交響曲第２番　第３楽章」（ドイツ）
4	ジャコモ・プッチーニ	オペラ「マノン・レスコー」間奏曲（イタリア）
5	ユリウス・フッシク	フローレンスマーチ（チェコスロバキア）
6	ヨハン・シュトラウス	「ウィーン ウアイブ ウンド ゲサング」（オーストリア）
○	みんなで歌おう	
	ゲオルグ・リーデル	「イーダの夏の唄」（アストリード・リンドグレン作詞）（スウェーデン）
7	エドヴァード・グリーグ	「ノールウェー舞曲」（ノルウェー）
8	ジョーン・フィリップ・スーザ	「星条旗よ永遠なれ」（アメリカ）
9	ラーシュ-エーリック・ラーション	パストラ組曲「ロマンスとスケルツォ」（スウェーデン）
○	「スウェーデン国歌」	
10	ピョートル・チャイコフスキー	「交響曲第４番　第４楽章」（ロシア）
	ジャック・オッフェンバック	アンコール曲「天国と地獄」（ドイツ生まれ、フランス）

(備考)
「帆掛け船が走る限り」「イーダの夏の唄」「スウェーデン国家」は本文で引用
クリスチャン・ルークはスウェーデンで人気のあるテレビ司会者
アラン・ギルバートはアメリカ国籍。父親はアメリカ人、母親は日本人。両親共にニューヨークフィルのメンバー

2　新聞と読書

よく新聞を読む国民である。車内、公園、自宅のベランダ、あちこちで新聞に読み耽る姿に出会う。ダーゲンス・ニィヘッテル（DAGENS NYHETER）やスヴェンスカ・ダーグ・ブラーデット（SVENSKA DAGBLADET）などの日刊紙は自宅まで配達され、タブロイド版のエクスプレッセン（EXPRESSEN）やアフトン・ブラーデット（AFTONBLADET）は店頭販売である。地下鉄の駅に置かれる無料のメトロ（METRO）もストックホルムっ子に好まれる。

読書愛好家も多い。国民人口885万人の公共図書館は年間7,189万冊を貸し出し（1998年）、赤ちゃんから高齢者まで国民１人が年間８冊以上を借りる計算になる。病院の患者のための図書サービスでは、年間60万冊近くの本が借り出される。船員組合では、外国の港でスウェーデン教会が窓口になって図書が借りられるようにしている（数字は、STATISTISK ÅRSBOK för Sverige 2000）。

写真１５　新聞はスウェーデン人の日常的楽しみ。日光浴をかねて

6.　安らぐ住まい

1　休息に適した住宅

1）くつろげる住まい

自宅で休息するには、快適で適度の面積がある住まいがほしい。親子（共働き父母と成人前の子ども）が住む家は、夫婦と子どもの生活単位が確保され、しかも共有部分として居間やダイニングがいる。寒さや暑さ、騒音などから守られ、他人から干渉されず、上下水道や光熱費など公共料金が適切に抑えられる必要がある。サラリーマンが無理しなくても購入または賃借できる住宅費でなくてはいけない。

住宅地域に緑地や公園があれば散歩できる。しかもバスや電車など公共輸送機関が住宅地近くまで伸びていなくては通勤が「痛勤」になってしまう。アパートの地下に駐車場を整備し、手頃な値段で借りられれば、不法駐車が渋滞を引き起こすこともない。

この国では都市政策と住宅政策が連携し、これらの諸条件を巧く充足させている。しかも子どもがいて収入の低い親や、年金だけの高齢者や障害者には住宅手当金（2000年現在、月額最高3,500kr）が支給され、全国民が一定水準以上の住宅に住まえる。現在、都市部は住宅が不足し、コミューンは宅地としてウォーターフロントを開発し懸命であるが、急ぎながらも良質の住宅を確保するのがスウェーデンである。

写真１６　イケアの家具は、今や世界のイケア

2）住まいをつくる

就学前学校（旧保育園）や基礎学校に木工の時間があって、子どものときから大工仕事などに親しんでいる。住まいづくりの材料や道具を売るFREDELLSなどの店がはやり、セカンドハウスはもちろん一戸建てでも、外壁のペンキ塗りをする玄人跣（くろうとはだし）の人も多い。

ところで北欧家具というと高級なイメージが売り物で、何世代も使用でき、アンティークの店やオークションを飾る年代物もある。しかし現在はスウェーデン家具としてポピュラーなのは、ＩＫＥＡ社の製品である。居間、ダイニング、台所、寝室、浴室、子ども部屋など、スプーンやコップから大型家具まで、寝具、遊具、園芸用具、観葉植物まで、住まいに関する品物は何でも買える。店内には自社製の椅子やテーブルを配置したレストランがあり、家具の大型デパートは週末は客でごった返す盛況ぶりで、北欧のみならず世界各地に進出している。ＩＫＥＡ社の製品は、安価、丈夫、見栄えがする。ベッド、棚、テーブルなど平面の状態で購入して、宅配もあるが、たいていは自家用車の屋根に縛りつけたり（日本では道路交通法違反）、車のトランクに押し込んで、家に持ち帰ってから、立体的に組み立てる。住まいをつくる楽しみがある。

写真１７　セカンドハウス ＋ キャンプ ＋ ボート

2　自然と共存するセカンドハウス

長い休暇を楽しむセカンドハウスは、森や湖のほとりにステューガ(stuga, 英語の cottage) と呼ぶ山小屋風の木造建築である。セカンドハウスにも郵便配達がある。広範囲に点在するから配達はブロックごとになり、表通りに面した所に色とりどりの郵便受けがセカンドハウスの戸数だけ行儀よく並ぶ。住人は散歩がてら郵便物を取りに来る。

メーデーが過ぎて日中の時間が日増しに長くなり、新緑が黄金(あざやか)に大地を染める季節ともなると、人びとは夏のバカンスに期待しながら週末はセカンドハウスに通い、外壁を塗り直すなど手入れに余念がない。セカンドハウスを個人的に維持するのがむずかしければ、公営セカンドハウスを借りるという手もある。

夏至祭の頃からセカンドハウスで使う家具やキャンプ用品の売り出しが最高潮に達する。戸外で食事をするには最適なシーズンで、ガソリンスタンドでもバーベキューの道具を売るし、キャンプ場では、燃料とソーセジなど食料をもって行けば設備がある。キャンピングカーに犬、草花、食料を乗せて野山や水辺に出かけ、キャンプするのも夏の楽しみである。キャンピンクカーを所有しなくても、週単位で手頃な値段でレンタルできる。シーズン中はキャンピングカーやテントが緑に映える。

白夜の北欧である。夏至の頃は、首都ストックホルムでも日の出は午前３時半、日の入りは午後10時過ぎで、天気がよければ午後11時でも残照が明るく、日の出前から地平線下の太陽は空を照らすから、夜の時間はごくわずかである。北極圏では、太陽は沈むことを忘れてしまう白夜である。

森林浴と日光浴の日々を過ごし、水辺のセカンドハウスやキャンプなら水浴が加わる。ボートやヨットを楽しみ、サンデッキに半裸で何時間も座り、バルコニーで読書に耽る。あとは三食の支度と掃除といった生

活拠点がセカンドハウスである。森を歩くのにゴム長靴は必需品である。雨にでも振り込まれれば、長靴なしには過ごせない。秋はキノコやベリーを求めて森に入るために再びセカンドハウスを利用する。文明から離れて簡素な、原始的な生活をする。

写真１８　カール・ラーションが描いた子どもたち

画家カール・ラーション（Carl Larsson）は、ダーラナ地方の自然を舞台に百年ほど前に、美しい妻カリンと天衣無縫な子どもたちを題材に数々の絵を残し、今日も圧倒的な人気がある。当時のまま、彼らの家と周辺の自然が保存され、多くの見学者を集める。彼の絵と故郷はスウェーデン人の心象風景のようだ。

7.　外に出る

1　球を追う

郊外のゴルフ場にはグリーンが広がり、その中に木立ちや水辺が残されている。自分でゴルフ用具一式を移動させ、汗をかいて楽しむ。ライセンスがあれば安価な費用で子どももコースに出ることができ、初心者向きの練習場も別にある。これとは別に街角のミニゴルフが老若男女に人気があり、パターを使って、山あり谷ありのゲーム気分である。

若者にブール（BOULE）が流行し、まず小さな玉を投げて、そこへテニスボール大の鉛の球を投げて小さなボールに寄せるという単純なゲー

ムで、２～３人から数名が楽しんでいる。水浴場やキャンプ場には、ビーチバレーのコートがある。サッカーや野球は、青少年を夢中にさせ、冬はアイスホッケーである。ビョーン・ボルィ（Björn Borg）を輩出したスウェーデンはテニスが盛んで、コートも完備している。

特大の球「気球」は夏の夕空を飾る。新聞広告（ＤＮ）によると、料金は1,695kr（約２万円）とか。空中散歩をしてみたいものである。

写真１９　ゴルフ場でコースの順番を待つ中学生

写真２０　町のミニゴルフは老若男女に大はやり

写真２１　空の散歩を楽しむには気球が最適

２　旅を追う

サイクリングは男女のペアや親子連れに好まれるが、中年男性が独りでこぐ姿もほほえましい。ツーリングの主流はオジサン世代で、カップルたまには中年女性など大人の遊びである。「ボルボ車」の国は無料の高速道路が整備され、国土が広いだけに車は重要な移動手段で、ドライブは楽しみである。

北国の人は南に憧れて旅をする。夏ならキプロス、ギリシャ、トルコなど輝く太陽そして青い空と海は、スウェーデン人を満足させ、２～３週間は１カ所に滞在する。冬はコンドミニアム型のキッチン付きホテルを利用し、スペインあたりが好みであるらしい。夫婦や家族が旅の単位である。地中海やカリブなどのクルージングも根強い人気がある。

私も短いが地中海８日間のクルージングを体験したが、陸・海・空の総合観光産業のおかげで快適であった。ストックホルムとパロマ（スペインのマジョルカ島）の間をチャーター便が結び、北極近くから地中海までひと飛びで、船と空港の間は専用バスが送迎する。キャビンはホテル並みで、サンデッキやプールが整い、食事や飲み物も豊富で、夕食は正装によるフルコースで選択の幅は大きい。夜はショーがあり、宵っ張りの人には夜食サービスもある。英国、カナダ、アメリカ、北欧からの船客1200人と乗務員400人が乗り込み、共通語は英語である。港の間の

移動はほとんどが睡眠中で、イタリアはジェノバなど３港、フランスはリヴィエラ、スペインはバルセロナに寄港し、パロマに戻る。昼間は港に停泊しており、陸地の観光もできる。日常から離れた快適な時間に満足し、リピーターになりそうである。

写真２２　親子、夫婦でサイクリングは手頃

写真２３　クルージングは非日常のリフレッシュ

このクルージングも旅行会社を通して申し込むチャーター旅行であったが、新聞は旅行業者に関する評価を掲載する。消費者には貴重な情報であるが、旅行会社は緊張する。今年も夏のバカンスが一段落した頃（ＤＮ2000年9月3日）、旅行客を集めた上位一覧（chaterns topplista）が明らかなり、Fritidsresor、Ving、Apollo、Always、Spies 社の順であったが、合わせて苦情の多い順にも会社名が明らかになった。ちなみに私はVing を利用したが、苦情はもっとも少なかったという。

3　目で追う

催しもの情報が新聞などで伝わり、人びとが集まる。

まずは陸であるが、ジョギングやマラソンがさかんであるだけに、さまざまなマラソン大会が催され、なかでも1982年から恒例の「真夜中マラソン（midnattsloppet）は８月中旬に行われ、おもしろい。１万７千人の参加者が、暗い車道を駆け抜ける様は壮観である（写真24）。今年も沿道は応援と見物人で埋めつくされ、音楽隊が雰囲気を盛り上げていた。この大会に出場するために、夏の間中トレーニングに励む人もいる。

全国から集まった同性愛者８千～１万人のパレードが８月にあり、沿道に集まったのは４万人だったという（写真25）。私もゴール辺りに出かけてみたが、軍隊、警察、医師、政党などグループごとの行進を不思議な気持ちで見つめた。翌日の新聞（ＤＮ）は『太陽のもと堂々たるプライドパレード』というタイトルで、次のように報道している。「カーニバルのような雰囲気で、数千人が行進した。ディスコ音楽がガンガン鳴らされ、虹色のシンボルカラーのノボリや旗がはためき、参加者の顔は晴れやかであった。1998年からやっているが、観衆は徐々に理解を示し、偏見が減ってきていると主催者はみているという。」

空では、晩夏恒例の小型飛行機の航空ショーは、試乗もできるので人

びとを集める。

海や湖の沿岸にも人びとは集う。今夏は数回の花火大会がバルト海で催されたが、見物客がいっぱいであった。冬の花火も格別で、新年のページを開けるとき、全国的に花火が打ち上げられ雪の白さに映える。港では碇泊中の船が一斉に汽笛を鳴らし新年の挨拶をし合う。ストックホルムではバスや電車が終夜運転で無料であることもあって、膨大な見物客でごったがえし、零下の寒さも忘れてしまう熱気である。

毎年４月30日の夕刻に全国で行われるマイ・ブラーサ（Majbrasa 直訳すれば「５月の火」）は、春を呼ぶヴァールボルィ（Valborgsmässo afton）と呼ばれ、雄大な焚き火は空を焦がし、何千人もの顔が炎を映して赤く染まる。

人口密度の低い国だけあって、都市でも日頃は閑散として静かである。ところがこれらの催しがあると、どこにこんなに人間が住んでいたかと思うほど、大勢の人々が集まり、楽しみを共有する。

写真２４　「真夜中マラソン」はタイムを競う人、楽しむ人さまざま

写真２５　同性愛者による「プライド・パレード」参加の社会民主党

まとめ：休暇を追う

冒頭に紹介したように、「余暇を楽しむゆとりなし」という日本人の自己評価は、スウェーデン人から見ると「日本人に休暇なし」という評価になり、差がある。この小論では労働と休暇のバランス感覚が抜群のスウェーデン人の休暇に焦点を合わせてみた。仕事上手で、遊び上手、しかも稼働年齢中は男女ともに働き、育児休業など人生に必要な休暇をきちんととる。自然への万人のアクセス権と自然の保護の共存、そして福祉に代表される生活の質の保障は賢明な税金の使途ゆえに、ゆたかな休暇の過ごし方に反映している。

なお、催物などは主としてストックホルムに関して述べた。またスウェーデン語の資料は詩を含み、藤田の責任において翻訳し、写真はすべて藤田が撮影した。